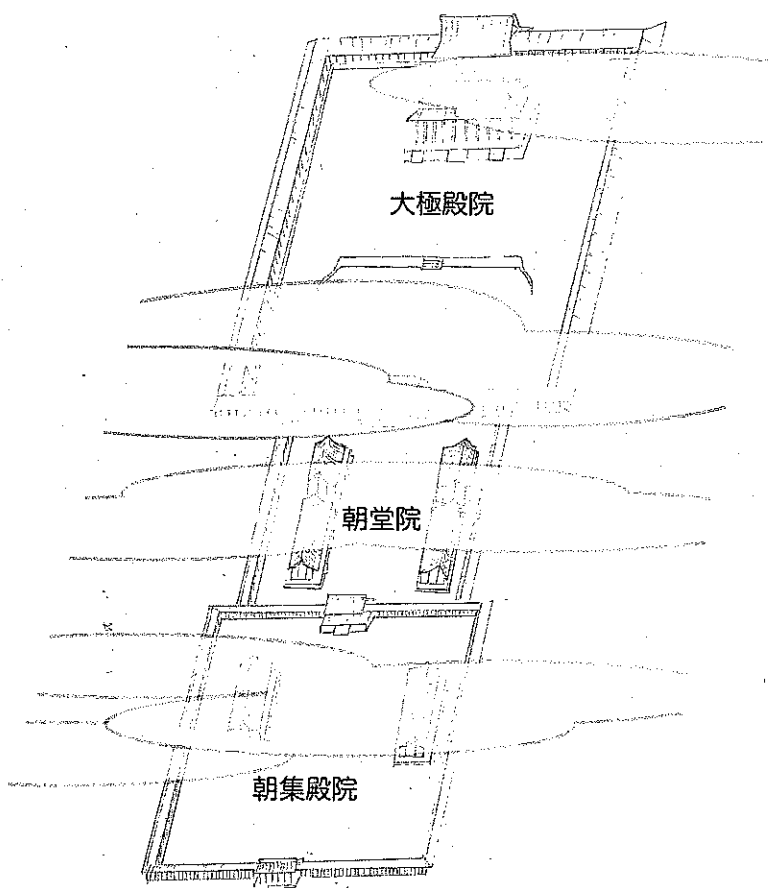


平成 23 年度

く に き ゆ う あ と

恭仁宮跡発掘調査

現地説明会資料



京都府教育委員会

平成 23 年 10 月 30 日 (日)

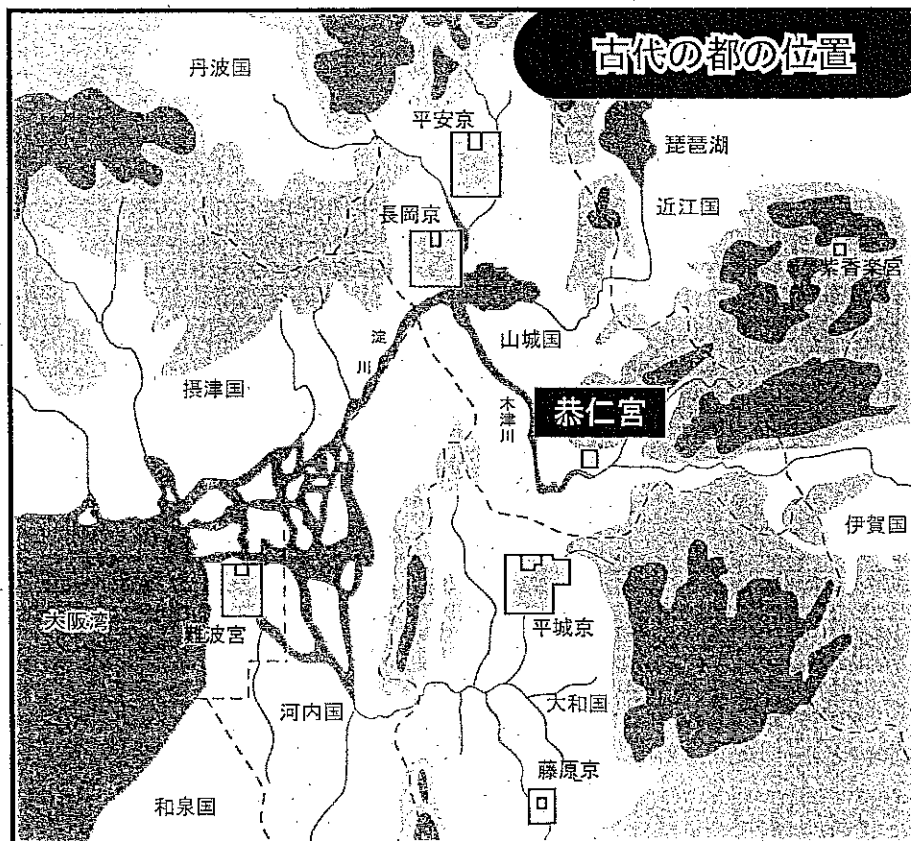
はじめに

京都府内には、古代に平安京、長岡京、恭仁京という3つの都が造られました。京都市の中心部に造られた平安京は、延暦13(794)年から明治元(1868)年に首都が東京に遷るまでその役割を果たした、いわゆる「千年の都」です。また、平安京に都が遷される直前の延暦3(784)年からの10年間は、現在の向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて造られた長岡京で政務が行われました。

そして、この3つの中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12(740)年に、聖武天皇により、現在の木津川市加茂町、山城町、木津町にわたって造られたのが「恭仁京」、その中心となるのが、加茂町瓶原の地に造られた「恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏、政治や国家の儀式などが行われた大極殿や朝堂院、さらには役人達が仕事を行った役所(官衙)など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする木津川市の一帯は、短期間ながら国の首都となっていたのです。

しかし、そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大坂の難波宮へと移され、さらには平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は、短い役目を終えた後、天平18(746)年に山城(山背)国分寺へと造り替えられました。



これまでの調査成果

昭和48年度以降、京都府教育委員会や加茂町（現木津川市）教育委員会が実施している発掘調査によって、宮の範囲、大極殿や内裏などの宮内の主要な施設が見つかり、恭仁宮の実態が少しずつ分かってきました（第1図）。

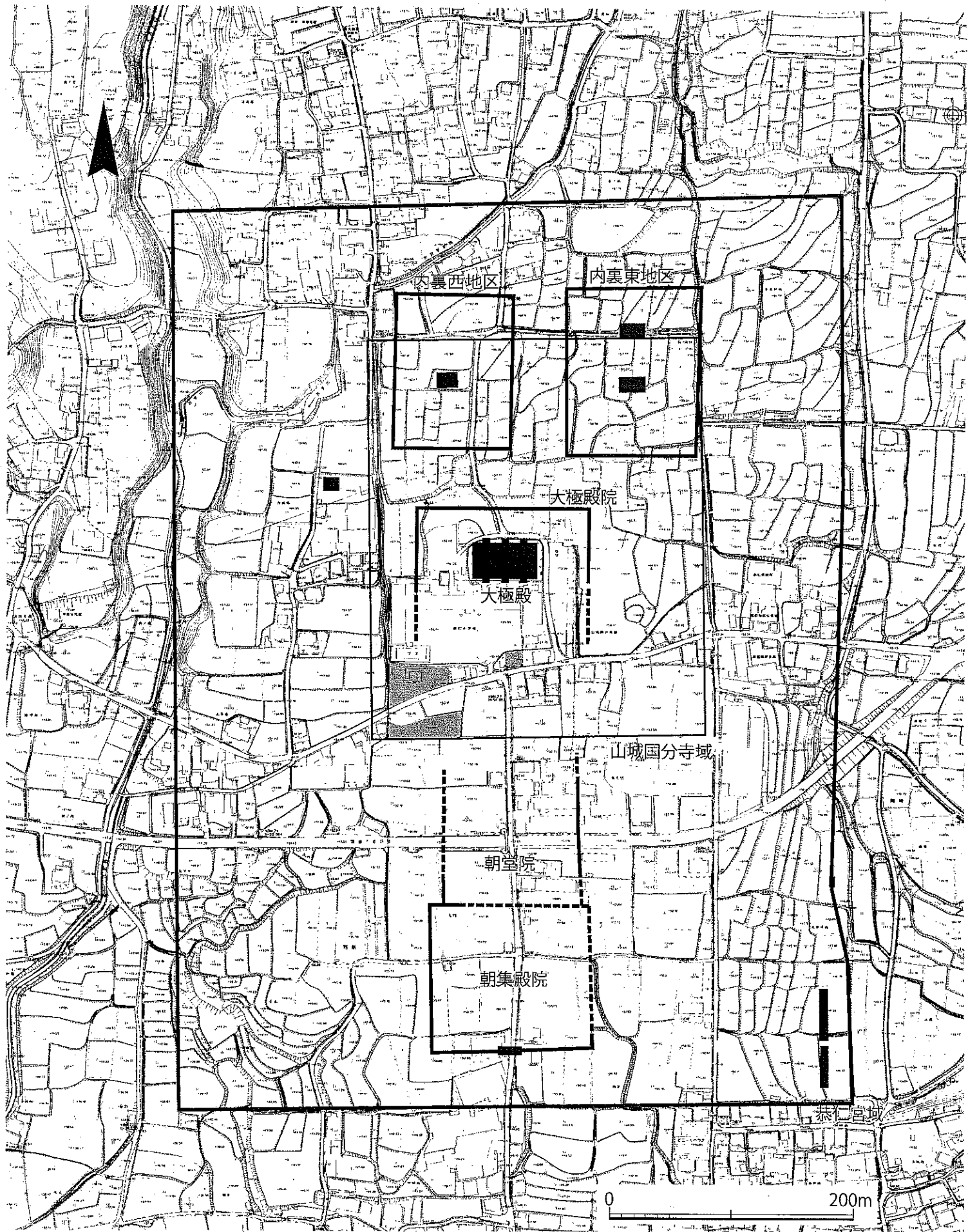
恭仁宮は東西に約560m、南北に約750mの大きさを設計され、その周囲は背の高い土塀（築地塀）で囲まれていました。

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1m以上の大きな土壇の上に築かれた東西が45m、南北が20mもある大きな建物でした。朱塗りの太い柱を大きな石材（礎石）の上に建てた礎石建物で、北西と南西の隅に置かれた礎石は、当時のまま動かされていないことが調査によって分かりました。

大極殿院を取り囲む回廊は、北西隅付近を確認しています。回廊は築地を中央に築き、その両側を通路にした「複廊」と呼ばれる立派な形式のものです。奈良時代の公の歴史書である『続日本紀』には、平城京から恭仁京へ都が遷された際、平城宮の大極殿とともに、その周囲に設けられていた「歩廊」を恭仁宮へ移築したことが記載されています。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿跡や築地回廊が、平城宮と同じ規模で造られていることが確認され、『続日本紀』の記述が裏付けられました。

大極殿院の北側には、内裏に相当する施設が東西に2つ並んで設けられていたことを確認しています。現在のところ、この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」、「内裏東地区」と呼んでいます。このような施設の配置は、恭仁宮だけの独自のもので、どちらが天皇が住まいされた内裏なのかは、はっきりしていません。「内裏西地区」は、周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれた、東西約98m、南北約128mの大きさです。「内裏東地区」は北側が板塀（掘立柱塀）で、残る南側、東側、西側は土塀（築地塀）で囲まれた、東西約109m、南北約139mの大きさで、「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることがわかっています。

朝堂院・朝集殿院では、これまでその周囲を区画する板塀（掘立柱塀）の一部が確認されています。朝集殿院は、東西約134m、南北約125mの規模で、南側の朝集殿院南門が見つかっています。朝堂院は、朝集殿院よりも東西幅がやや狭くなることがわかっています。このことから、恭仁宮が平城宮を手本として造られた可能性があることもわかってきています。



第1図 恭仁宮跡全体図及び平成23年度調査対象地位置図(1/4,000)

平成 23 年度調査の目的

平成 7 年度に、恭仁宮の四至が東西に約 560m、南北に約 750mの規模であることが確定しました。その後、平成 21 年度までに内裏と朝集殿院の区画が明らかになり、中心部分の区画で判明していないのは、大極殿院の南に面した回廊（大極殿院南面回廊）の位置、つまりは朝堂院の北辺部分だけとなりました。

大極殿院と朝堂院の境界の有力な候補地は、現在の恭仁小学校のグラウンドと、その南側の宅地部分との間にある地形上の段差で、その距離 395 尺前後（約 117 m前後＝当時の物差しは、1 尺が約 30cm ですので、柱間の距離はその倍数）が、大極殿院の規模である可能性が想定されていました。

昨年度は、大極殿院との境界に至るまでの朝堂院西辺区画の位置を確認するための調査を実施しました。しかし、想定より短い、朝堂院の南辺から 510 尺（約 151m）の位置で朝堂を区画する柱穴跡が途切れてしまいました。そこで、周辺をさらに調査したところ、朝堂院の区画と直交するように並ぶ 2 つの遺構を検出することができました。この 2 つの遺構は、その位置が大極殿院の南面回廊に関係するものである可能性があることが分かりましたが、昨年度は確定には至りませんでした。

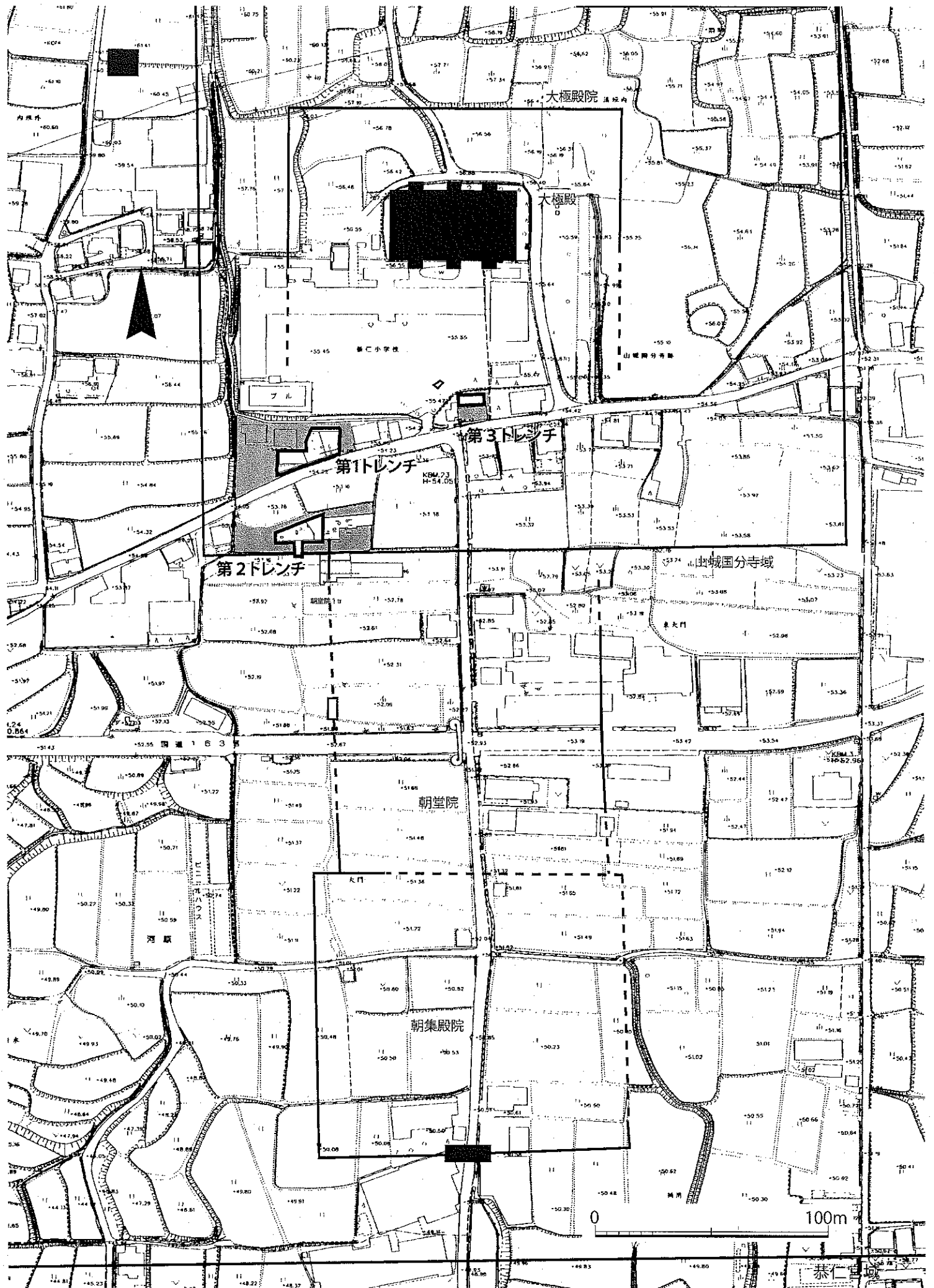
これにより、大極殿院の規模は南北 395 尺前後とする第 1 案と、平成 22 年度の遺構を評価して南北 580 尺とする第 2 案の 2 つの可能性がでてきたのです（第 3 図）。そこで、今年度の調査は、大極殿院と朝堂院の境界を確定することを目的として、昨年度調査区の西側と北側にトレンチを設定しました。

平成 23 年度の調査でわかったこと

○第 1 トレンチ（第 4 図）

このトレンチは、第 1 案であれば、朝堂院の柱穴が、第 2 案であれば、大極殿院の礎石据付穴が見つかる位置に調査区を設定しました。しかし、どちらの遺構も検出することはできませんでした。周辺は、鎌倉時代頃には耕地化が進んでいるため、奈良時代の遺構は、完全になくなってしまふほど削られてしまった可能性が考えられます。

この調査区では、鎌倉時代の溝（SD11101）が見つかりました。溝の規模は



第2図 平成23年度トレンチ配置図(1/2,000)

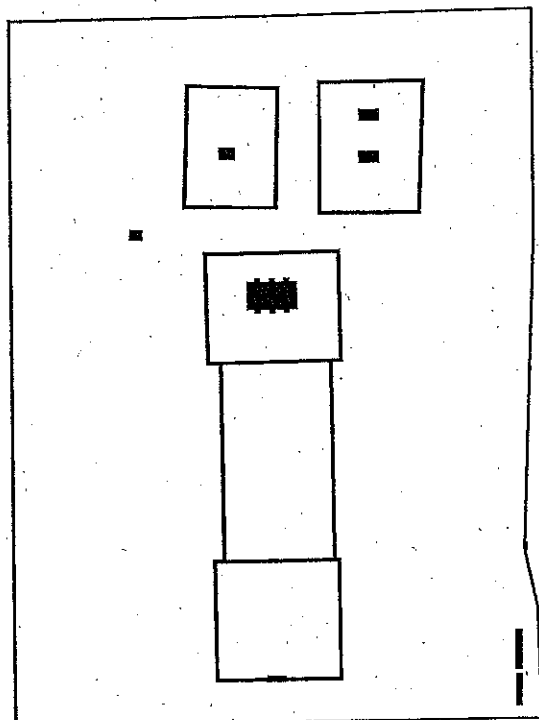
幅が1m以上、深さは15cm程度の浅いものでした。この地点は、恭仁宮が廃絶した後、鎌倉時代までは国分寺として利用されていた場所ですので、この溝は、国分寺が衰退していく様子をうかがうことができる遺構であるといえます。

このトレンチでは、コンテナに18箱分の瓦や土器が出土しました。中には、「乙万呂」と刻印された平瓦も出土しています。

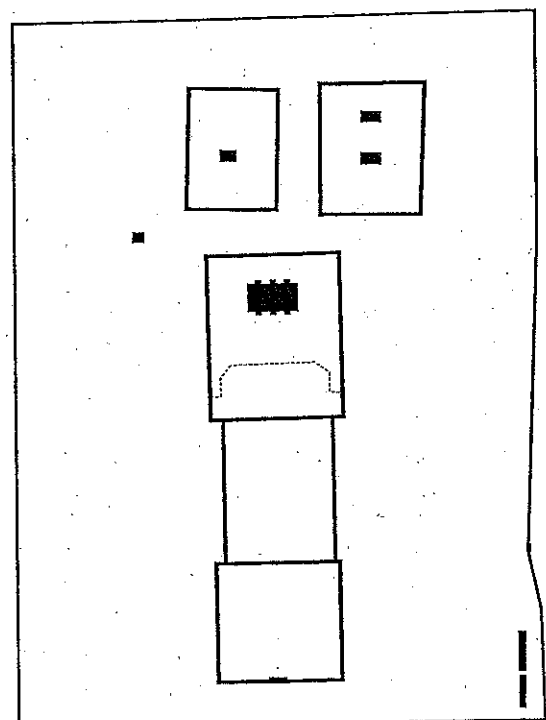
○第2トレンチ（第4図）

昨年度の調査で見つかった遺構の西側に接する位置に、第2トレンチを設定しました。昨年度想定した第2案であれば、ここでは大極殿院南面回廊に伴う3基の遺構が確認されるはずでした。しかし、見つかったのは、礎石を据え付けるための穴とみられる1基の遺構（SP11201）だけでした。

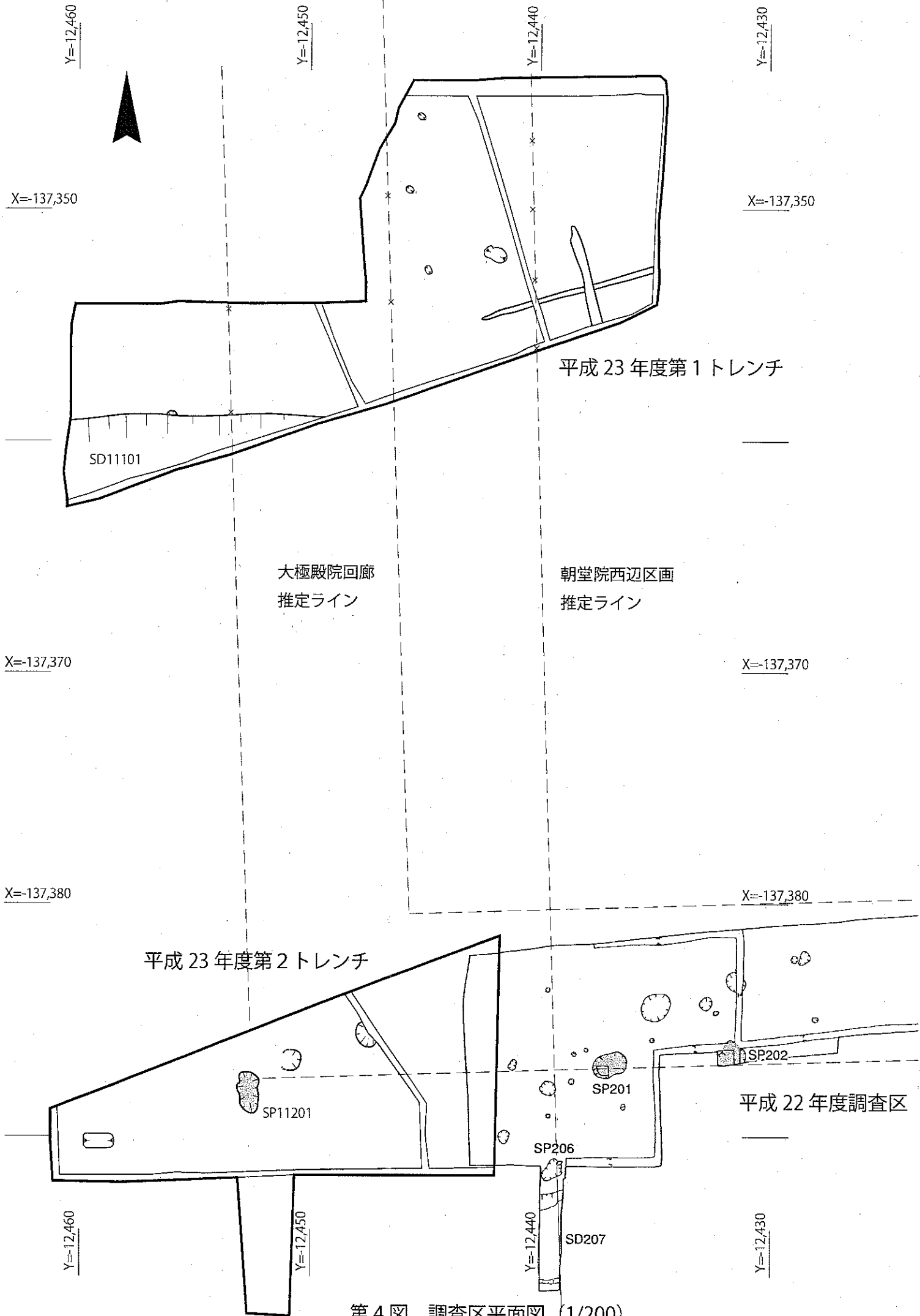
このSP11201は、平成19年度の調査で確認された大極殿院北面回廊の北西隅の礎石据付穴からの距離や角度が、ちょうど対になる位置にありました。また、非常に小さいものですが、遺構の中から瓦の破片も見つかっています。し



第1案 0 200m



第2案 0 200m



第 4 図 調査区平面図 (1/200)

かし、これまで見つけていた大極殿院回廊に伴う遺構とは、形状が異なっていることもあり、回廊に伴う遺構として断定するには至りませんでした。

このトレンチからは、コンテナに14箱分の瓦や土器が出土しました。主に平瓦や丸瓦でした。

まとめ

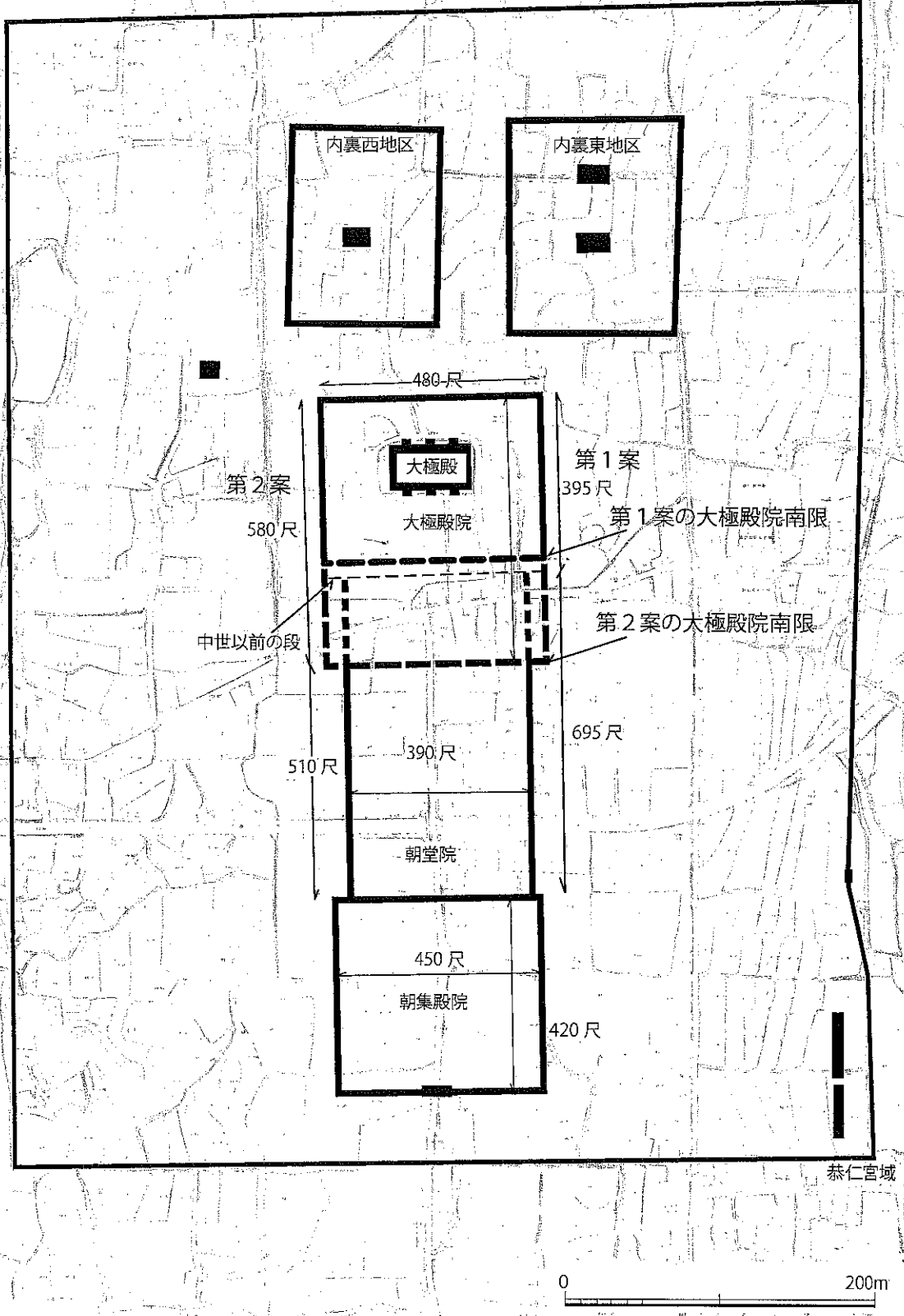
大極殿院と朝堂院の境界を確定するため、昨年度に引き続き調査を実施しました。大極殿院と朝堂院の境界がどこにあるのかという点については、昨年度の成果により候補が2案になっていました(第5図)。第1案は、従来どおり恭仁小学校のグラウンドと、その南側の宅地部分との間にある地形上の段差付近と考えるもので、この場合の大極殿院は395尺前後の規模です。これに対して、第2案は今回の第2トレンチ付近を境界と考えるもので、この場合は大極殿院の規模は580尺となります。これを確定することが今年度の調査目的でした。

しかし、第1トレンチでは奈良時代の遺構はすでに失われており、第2トレンチでは、大極殿院北面回廊の北西隅の柱と対になる位置で、南面回廊に関わる可能性のある遺構を検出しましたが、遺存状況が悪いため、どちらの案にも確定することができませんでした。

この2つの案には、それぞれ長所と短所があります。恭仁宮は、平城宮と比べると規模が小さく、その面積は三分の一程度しかないことがわかっています。第1案の場合だと、大極殿院は395尺前後の規模で、朝堂院の規模は南北700尺前後と、狭いながらも、実際に役人が政務をとったと考えられる朝堂院の南北の長さは確保されます。この場合、現在も残る1mほどの段差は、大極殿院と朝堂院との間にくる想定となります。

これに対して第2案の場合は、大極殿院の規模が南北580尺となるため、朝堂院の南北の規模が510尺と短くなります。これは、難波宮と比較しても半分程度の広さであり、極端に狭いものです。『続日本紀』には天平16(744)年の正月元旦に朝堂に^{かんじん}官人を集めたという記載があります。平城宮では朝堂院内に12棟の朝堂、難波宮では8棟の朝堂が配置されていたことがわかっていますが、恭仁宮ではそれを下回る数の朝堂しか配置できないこととなります。

第2案の長所は、大極殿院の規模にあります。恭仁宮の大極殿院については、



第5図 恭仁宮跡復元想定図 (1 / 4,000)

平城宮の大極殿と大極殿院回廊の一部を解体して恭仁宮へ運んだという記載が、『続日本紀』に残されており、大極殿はその記載のとおり、平城宮から移築されたことが発掘調査でも確認されています。

平城宮の大極殿院回廊については、少なくとも2160尺分が解体されていることが、発掘調査で確認されていたのですが、第2案の場合は、それにほぼ相当する2120尺分の長さの回廊が、恭仁宮で築かれていたことになり、その点では整合性が高いといえます。この場合、現在も残る1mほどの段差は、平城宮などで確認されている大極殿院の中の^{りゅうびだん}竜尾壇に相当するという想定になります。

ただし、今回の調査では決定的な成果は得られず、大極殿院の規模の確定には至りませんでした。奈良時代以降の成果としては、鎌倉時代の溝が検出されたことなどから、恭仁宮が廃絶した後の時代に、国分寺が衰退していく過程で、どのように耕地化が進められ、現在の恭仁宮跡周辺の景観が形成されていったのかという点についての成果が得られました。今後の調査をさらに進めることにより、恭仁宮跡周辺の地域社会がどのように変化し、現在の生活へと繋がっていったのかが明らかになっていくものと考えられます。

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、各方面から御指導、御協力いただいた方々に、深く感謝いたします。
